

二〇二三年一〇月一日

■巻頭言

久々の対面での大会を終えて

吉川 仁子

二〇二三年度の関西支部春季大会は、京都外国語大学を会場とし、対面とオンライン中継併用で開催された。大会の対面開催は、二〇一九年の秋以来、三年半ぶりのことだった。会場設営の時、任期四年目の委員が、自分の任期中初めての対面開催で、勝手がわからないと話していたのが印象的だった。「受付」や「芳名録」も久々の出番だ。過去の対面開催を思い出しつつ、動線を考えながら受付を設置し、来場者を迎えた。対面参加約六〇名、オンライン参加約四〇名の、約百名の参加を得て、特集「〈中島敦〉の現在とこれから」を開催できた。御参加の皆様、会場校の皆様、に心より感謝申し上げたい。

会場では、知人を見つけ、駆け寄って挨拶する光景があちこちで見かけられた。質疑応答もお互いの表情や反応を確かめながら行える。やはり、対面はいいなと、ご参加の皆さんもお感じになったことだろう。今後も対面開催が続くようにと願わずにはいられないが、一方で、オンラインの恩恵もまた捨てがたい。関西支部では、二〇二二年度より、機器類の扱いに詳しい運営委員を中心としたオンライン担当班が学会運営を支えてくれている。これまでに蓄積したノウハウが春

季大会でも生かされ、対面とオンライン中継の併用がなかった。今年度から会費制がスタートしたことも考え合わせると、遠隔地からも参加可能なオンライン中継は、より多くの会員のより広い参加につながるメリットとして大事にすべきことだろうと、個人的には考えている。対面とオンラインの併用は、もちろん手間も費用も掛かる。総会でお認めいただいたように二〇二四年度着任の委員より任期を三年とし、運営委員の負担軽減を進めていくことになっている。会員のメリットを損なわず、委員の負担軽減も図るとなると、バランスを取るのには難しいことだと思う。しかし、オンライン参加の維持継続などが、多くの会員の積極的な学会参加につながれば、委員にかかる負担も軽くなっていくのではないかなと思うのだが、楽観的にすぎるだろうか。

二〇二三年度は、会費制、機関誌など、スタートしたばかりの新しい取り組みを、しっかり根付かせていく大事な年になってくる。引き続き会員の皆様の力強いご協力をお願いしたい。秋季大会は近畿大学を会場とし、対面とオンライン併用で、六名の会員が自由発表を行う予定である。皆様のご参加をお待ち申し上げる。会場で、オンラインで、お会いいたしましょう。

■支部大会のご案内

二〇二三年度 秋季大会

日程：二〇二三年十一月二日（日）

場所：近畿大学

※ オンラインでの中継も予定しております。詳細については、同封の別紙ならびに、関西支部公式ブログをご確認ください。



【プログラム】

■開会の辞

近畿大学 中田睦美

■自由発表

小杉天外「魔風恋風」論——「女学生」をめぐる言説の変遷と立身出世—— 吉井美稀
批評の萌芽——小林秀雄「からくり」論—— 佐々木梓

三島由紀夫「火宅」論——占領期の言語空間を背景に—— 霍思静

三島由紀夫「貴顕」論——ペイター受容と「肖像画」をめぐる—— 福田涼

安部公房『砂の女』論——変革する「砂」—— 長澤拓哉

筒井康隆と演劇的小説——短篇「家族場面」分析から見えるもの—— 太田帆南

■閉会の辞

関西支部支部長 関肇

※ 懇親会（飲食有）を開催の予定です。

■研究発表

「自由発表要旨」

小杉天外「魔風恋風」論——「女学生」をめぐる言説の変遷と立身出世—— 吉井 美稀

小杉天外「魔風恋風」は、女子教育の理念が西欧志向の女性論から富国強兵の思想に基づく良妻賢母主義へと変化していた明治

三六年、当時の『読売新聞』による女学生バッシングの中で同紙に連載が開始された。焦点となった「女学生の堕落」について、土佐

亨（一九七五）は天外が示唆したモデルを推定・考察し、菅聡子（二〇〇一）は主人公の

萩原初野が堕落する過程に読者の興味を転換させたと述べているが、作中で女学生への

攻撃として初野に向けられる罵倒は世論の受け売りにしすぎない。それに対し、初野

の抱く立身出世欲は明治維新後の身分制度廃止に伴う明治政府の政策、福沢諭吉『学問

のすゝめ』をはじめとするベストセラー、さらに雑誌『成功』などが主に苦学に励む庶民

やエリート青年を想定して牽引した社会的上昇欲求と似通っており、女学生よりむしろ

青年男子の立身出世観を持つ初野に、作中においても現実問題に裏打ちされた批判が加

えられている。

本発表では、初野の立身出世欲に着目し、「女学生の堕落」にまつわる作品評価を超え

て本作を読み直す。具体的には、物語の進行を追いつながら『読売新聞』の読者投稿欄や特集記事などをもとに論調の変化を検証しつつ、本作が当初の堕落女学生を扱った写実小説の立場を脱却していく過程について論証していきたい。特に、天外が初野を女学生でありながら立身出世という男性の領域に踏み込ませた試みは、現代においても再評価の余地があると考えている。

批評の萌芽——小林秀雄「からくり」論——

佐々木 梓

小林秀雄の小説「からくり」（『文学』一九三〇年）を収録した単行本『文芸評論』（一九三二）には、目次における小説や評論等の

区分はない。「様々なる意匠」（一九二九）や「志賀直哉」（一九二九）よりも前の冒頭

部分に本作は位置し、以降は評論が並ぶ。一方で、一九三〇年前後の小説も収めた『一つ

の脳髓』（一九三三）に本作は見えない。小説作品中、本作のみが評論集『文芸評論』で

の初収録であり、小説・評論の区別のない構成において、本作は評論作品ときわめて近い

位置付けがされているといえる。

本作について先行研究では、構成や評論との関連こそ指摘があるものの、読書行為を通じた主人公の視座の変化に関する十分な

分析は未だなされていない。その分析を行うことで、本作における対象を（見る）行為が、批評行為において対象を受容するといういわば初発期の段階の表現であることを明らかにする。

本作の主人公「俺」は、冒頭で活動写真をまやかしのように感じる。その後、ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』に感銘を受けた翌朝、「俺」は従弟からの絵葉書を手に、旅先の従弟の見た渡り鳥を探して空を見る。活動写真を観る冒頭と比べ、結末では、「俺」の視界と、葉書の空間との境界が曖昧になる。その変化には、前夜の、いわば作品への没入

体験に近い読書行為が起因している。同じラ

ディゲ作にもかかわらず、作中で評価されない『肉体の悪魔』と比較し、『ドルジェル伯』

が「俺」に及ぼした影響を分析する。そのうえで、作中の（見る）行為が、自己の認識の

中で対象を再生成する営為であることを示す。その営為はまさに、『文芸評論』収録作

品に代表される、同時期の批評との連続性を有しているのである。小説の形態でありながら、「からくり」には（批評）という営為の

萌芽が表れているといえる。

三島由紀夫「火宅」論——占領期の言語空間を背景に—— 霍 思静

三島由紀夫自ら処女戯曲と位置づける一幕物「火宅」（『人間』一九四八・一二）は、三島戯曲の初上演として俳優座で上演された。本作をいち早く論じた天野知幸（一九九七）は、戦後の「知識人」論争を踏まえて類型的な「知識人」の造形を貞次郎に見る。また、大橋裕美（二〇〇六）は、郡虎彦「道成寺」からの影響を指摘し、上演の状況を確認しながら幕切れの「紅蓮の焰」について考察した。それらでは、批評の言説あるいは戦後新劇の状況を中心として考察が展開されているが、作品そのものについては解釈の余地が残されている。

三島が「戦後の社会が火宅に象徴される」と自ら解説するように、本作は敗戦後の日本社会の状況を描いている。それを表象する細部に目を向けたい。たとえば作中、新聞を携えて登場する貞次郎は、それを昼過ぎまで読み耽る。彼が語る「夕刊の来ないやうな世」は、閉ざされた占領期の言語空間を寓意していることと見ることができる。また、妻の千代子と娘の千賀子がそれぞれ、貞次郎と対峙する場面が用意されている。千代子と千賀子による貞次郎批判の構図は天野論においても指摘されているが、それはあくまでも貞次郎の視点からの解釈であり、母と娘の関係は不透明である。本発表では、作中人物の相互関係を明らかにしつつ、占領期の言語空間を作品と照らし合わせ、「火宅」における新聞や小

説、映画といったメディアの表現と戦後という時代との関係を考察する。

三島由紀夫「貴顔」論——ペイター受容と「肖像画」をめぐる——

福田 涼

「貴顔」（『中央公論』一九五七・八）の語り手は、自らがものする「肖像画」の「筆致」について、「多分ペイターの短篇小説」のそれに「似るであらう」という。これを承け、先行論では本作におけるペイター受容の内実が探られてきた。十枝内康隆（二〇〇二）は、柿川治英の外見描写を視座として、両者の「筆致」の相似点を浮き彫りにしながらも、「物語作家」としての三島と、「純粋な肖像画」の書き手としてのペイターとの違いを強調する。新井正人（二〇一三）は『ウォオルタア・ペイター短篇集』（工藤好美訳、岩波書店、一九三〇・二）の「序」を踏まえつつ、ペイターの作品が内包する「描かれたもの」（内容）と「描き方」（形式）との「完全な一致」、あるいは「外面」描写と「内面」の表現の相即といった要素が、本作に齎した影響について考察している。

ただし、語り手が再三にわたり言及する、本作の「肖像画」という位置付けとペイターの諸作との関係については、十分な検討が為されてこなかった。本発表では、ペイター

「イマジナリイ・ポートレート」と「貴顔」の語りの構造を比較し、「肖像画」を自称する本作の語りの起点が「彫刻」の如き治英の「死顔」にあること、すなわち（新井論が着目する、治英の人となり自体とは異なる点において）「描かれたもの」と「描き方」とが共に「芸術」であるという「一致」を示していることを明らかにする。その上でペイター『藝術復興』（一八七三）も参照しつつ、「亡友」を「肖像画」という「平面」に封じつつ、自らを「肖像画家」＝「芸術家」として規定する語り手の企てについて論じたい。

安部公房『砂の女』論——変革する「砂」——

長澤 拓哉

一九五〇年代の安部公房は、作家であると同時に前衛芸術運動と社会運動の担い手でもあった。六〇年代に入ると作家活動に重点を置くようになるが、その出発点となった『砂の女』（新潮社、一九六二）は、国内外での評価を一気に高め作家にとって大きな転換点となった作品である。背景には、共産党から除名され、政治的に転向したかに見える安部の動向があった。

かつて佐々木基一は主人公仁木順平に戦後の政治的文脈における「変革者」の姿を見たが、以来本作の研究は、仁木の「変貌」に疎外状況とそこからの脱出を見るもの、「女」との関係論じたものの、「砂」の表象におけ

る花田清輝との関係を論じたものなど様々な方向に展開してきた。これらはいずれも「砂の部落」を同時代の「現実社会」の寓意とする読みを前提としている。だが、仁木の日常と地続きである都市のシステムの中に内包される空間として表象されていることを鑑みれば、「砂の部落」は寓意としてよりもむしろ現実的状況そのものとして捉え直されるべきである。

本発表では、五〇年代後半における安部の社会認識に注目し、「砂の部落」が表象する階級構造について考察する。そこに見られるのは「労働階級」の生活であり、彼らと仁木の関係には大衆と知識人の乖離という安部の共産党批判を見ることが出来る。加えて、外部の視点が置かれている作品構造に注目し、安部が模索してきた「記録芸術」の方法の反映を明らかにする。安部の大衆芸術の創造による戦後日本社会の革命の出発点として本作を位置付けることが本発表の狙いである。

筒井康隆と演劇的小説——短篇「家族場面」分析から見えるもの——

太田 帆南

筒井康隆「家族場面」（『SFアドベンチャー』一九九三年四月号）は、主人公の「おれ」が観ている夢の場面が次々に転換され、その都度「おれ」の設定も変わっていくという短篇小説である。本作には登場人物が自ら

の役割を模索し、即興で「演じている」というある種の演劇性を含んだ描写が見られる。この場合の演劇性とは、作中人物の行動が実際の舞台上での演技行為と重なることを指し、さらに筒井は一九八二年に「筒井康隆大一座」で旗上公演を行い、主役を演じるなど演劇活動に対しても精力的であったことも関係が深いことだと考えられる。また筒井は、自身を「あきらかに作家でありながら役者である」とした上で、演技行為を通して作品世界を解釈する必要性を述べているが、これまでに筒井の小説作品と演劇性の関係を詳細に論じた研究はなかった。そこで本発表では、短篇「家族場面」内の「おれ」が即興的に役割を演じていく姿に注目し、このような要素が作品世界を支えているということを描く。

さらに、谷崎潤一郎賞を受賞した長篇「夢の木坂分岐点」（一九八七年 新潮社）の中でも、主人公の精神的問題に向き合う際に「サイコドラマ」という即興劇が用いられている。このように筒井が繰り返し主題としている、作中人物が自覚的に役割を演じるという設定が象徴するものを「家族場面」分析から探り、そしてそれは筒井康隆本人の演劇観と深く関係しているということを明らかにする。

■大会印象記 二〇二三年度春季大会 特集 〈中島敦〉の現在とこれから

杉岡 歩美

二〇二三年度日本近代文学会関西支部春季大会は京都外国語大学で行われた。春季大会の「特集」は、「〈中島敦〉の現在とこれから」と題され、「〈中島敦〉文学研究の先端を見つめ、その可能性と問題について考えたい」と企画要旨冒頭に記載されたように、近年の「〈中島敦〉文学研究」の蓄積を感じさせるような内容であった。

一人目はボヴァ・エリオ氏（中島敦の文学における言語と死）で、彼は発表の目的として「中島敦を世界文学の中で読む」「古譚」を広く読む」ことを挙げた。従来の『古譚』研究の多くが、「山月記」をもとに読まれる点に触れ、『古譚』の最初の作品「狐憑」を出発点とし、「言語と死の主題」を読み解いた。「何を言えばよいのかもはや分からない」といった語りの困難性や、「死なないために語る、あるいは死を遠ざけるために語る」という衝動・本能」を、『古譚』のテーマとして見出した。

二人目は渡邊ルリ氏（中島敦における典拠受容と創作）で、中島文学と漢籍典拠を丁寧と比較し、紹介した。豊富な資料を用い、

明示された典拠、隠された典拠を如何に中島が作品に入れ込んだかなど仔細に分析した。ただ、資料の多さゆえに時間の制約があり、「李陵」に関する典拠についてはあまり触れられなかったことが残念であった。またの機会を楽しみにしたい。

最後には高芝麻子氏が、「中島敦文庫の漢籍から考える唐人李徴」との題で発表を行った。まず、李徴と同時代を生きた詩人たちの状況を整理し、「山月記」における李徴が詩人として生計をたてることの困難さを示した。また、高青邱に関する「詩に強い執着を持ち、その詩ゆえに惨殺された」とされる高啓は、中島敦にとつての「詩人のあるべき姿」の典型だったのではないか。」との指摘は興味深いものであった。

デイスカッションでは、ボヴァ氏から渡邊氏へ、渡邊氏から高芝氏へといった発表者同士の質疑応答が活発になされた。フランクなやりとりのなかで高芝氏の「唐代では人は当たり前前に虎になる」との発言が印象に残った。そのほか、会場内からも多くの意見が出た。「山月記」に関しては、「典拠と中島敦の独自性」や、『唐代伝奇』における袁孝像とは」といった質問がなされた。最後に大学教育での「山月記」を、どう高校での国語教育に生かすか、など実践的な問いも出て、示唆に富む時間となった。

藤原 崇雅

本特集では三本の発表があった。一本目の発表であるボヴァ・エリオ氏「中島敦の文学における言語と死」は、「狐憑」を主にとり上げつつ、短編集『古譚』における位置付けについて、ヘロドトス『歴史』や同短編集に収録される作品との比較を通じて考察された。

二本目の発表である渡邊ルリ氏「中島敦における典拠受容と創作」は、構想や表現がとり入れられた原話以外の典拠に注目し、作品生成の過程や、作者の企図がまとめられた。三本目の発表である高芝麻子「中島敦文庫の漢籍から考える唐人李徴」では、「山月記」における李徴の設定が整理され、杜甫をはじめとした同時代の漢詩人との比較が行われた。

質疑応答では、三者全員が言及していたため、「山月記」の解釈が話題になることが多かった。ここからは、発表および質疑応答を聴いて、感じたことを挙げていきたい。

まず、動物論などの理論を用いた先行論について、各論者がどのように考えているのかが気になった。近年、人文学研究において話題となっているこの理論は、敦研究においても積極的に参照されている。成立過程論的な方法が多く採られていた今回の発表の内容は、そうした分析とどう切り結ぶのかさらに

聴いてみたかった。

次に、敦が漢文を翻案して文学を書いたことの歴史性について、各論者がどのように考えているのかも気になった。敦が文学を書いていた期間は日中戦争の時期と重なっており、漢学者としてあることが独特の意味を持っていた。実際に、敦作品は汪兆銘政権下の上海で中国の人々向けに翻訳されてもいる。敦の文学がおもしろい、という旨の発言があったが、はたして読者全員がそう感じることできた文学であるのかは、考える必要があるだろう。

最後に、国語教育に関して質問が出ていたが、この質問は高等学校新課程の問題として議論が深まるように感じた。「山月記」は主に「文学国語」の教材に位置付け直されたが、今年度から使用されはじめた教科書を見ると、新課程では比較をめぐる言語活動の実施が推奨されている。特に、高芝氏の杜甫と李徴との律詩を比較して分析する手続きは魅力的であり、私も機会があれば参考にしてみたいと思った。

以上のようなことを感じたのは、今回の企画が充実していたからに他ならない。敦研究の現在について学べ、これから研究したいことがさまざまに思い浮かぶ特集であった。

■書評

開信介 著

『久生十蘭作品研究——〈霧〉と〈二重性〉——』

古閑 裕規

久生十蘭は近年『定本 久生十蘭全集』全十二巻（二〇〇九—二〇一三年）が刊行されたことでその全貌がうかがえるようになり、今後益々の研究の発展が見込まれる作家である。本書はそんな久生十蘭研究において初となる作品論集で、著者の博士学位論文に新稿を加えた全六巻と、全集未収の新資料を紹介した補論とにより構成される。

著者は本書の目的を「十蘭作品に頻出する〈霧〉モチーフと〈二重性〉モチーフを軸とした十蘭の小説技巧ならびに作品構造の解明」と述べている。〈霧〉モチーフは「作中で何らかの『型』として機能している雲霧煙霞などの描写」、そして〈二重性〉モチーフは「作中において対象が何らかの意味で二重化する／されるもの」と定義されている（三頁）。まず第一章、第二章では、新資料を含む全二六八作品を調査し、〈霧〉と〈二重性〉のモチーフについて、網羅的かつ具体的に分類及び事例分析を行っている。著者は文学作品において紋切り型ともいえるこの二つのモチーフの検討を通じて、十蘭の小説作法が「型にはまりながらも型を磨き上げ、終には

型を内側から食い破ること」だと明らかにしている（七六頁）。三章以降は個々の作品に焦点があてられる。第三章では「鶴鍋」（「西林図」）における同時代史的現実の摂取・反映の様相並びに見立てモチーフの構造と素材について、第四章では「予言」の語りの特徴について、第五章では「母子像」の〈二重性〉モチーフと翻訳の問題について、そして第六章では「湖畔」の「幻想文学」性について、〈霧〉または〈二重性〉のモチーフ、時にその両方と関連付けた論を展開している。最後に補論として、新資料の三澄半造名義の十蘭作品六篇を紹介している。

本書は全編を通じて先行研究を踏まえた本文精読がなされている。その最たるものが第四章「予言」論であろう。先行研究において「語り手の人称をはじめとする語りの観点」（一三五頁）から論じられてきた「予言」を、ナラトロジーの知見を用い、テキストに即して具体的に分析しなおしている。そして「予言」の構造の核に「現実と幻覚あるいは実在と虚構をめぐる〈二重性〉」を見出し、それが語りにも反映されている（一六二頁）という、〈二重性〉モチーフと関連付けた新解釈を提示している。

本書は今後の久生十蘭研究における必読必携の書となるであろう。

（二〇二三年三月二〇日 和泉書院 二五五頁 三二〇〇円＋税）



山根直子 著

『尾崎翠の詩学』

石原 深予

本書は山根直子氏の博士学位論文「尾崎翠研究——〈読むこと〉と〈書くこと〉、後期連作を中心に——」に基づいた著書である。序章では尾崎の生涯の前半となる、作家として活動した昭和戦前期までと研究動向が概観され、本書の構成を述べる。著者は尾崎翠の文学には〈告白〉×〈象徴〉×〈追憶〉×〈分心〉×〈対話〉の五つの鍵概念があるとし、尾崎翠の代表作「第七官界彷徨」と同作に関連する作品群を論じることで、尾崎翠文学の魅力とその詩学に迫ることを目的とする。終章では各章が振り返られ、尾崎が作家活動から退いていく過程と市井の人として生きた後半生を論じる。

本書は第一章「第七官界彷徨」論——〈象徴〉の詩学」、第二章「歩行」論——〈追憶〉の詩学」、第三章「こほろぎ嬢」論（一）——〈告白〉の詩学」、第四章「こほろぎ嬢」論（二）——〈分心〉の詩学」、第五章「地下室アントンの一夜」論——〈対話〉の詩学」

で各作品を論じるが、随時作者の意図を推察し、伝記事項や種々の他作品との関連にも言及することより、作家論の枠組みを持つ。とはいえ本書の読みどころは、作品解釈に関する実証的調査の確かさと発想の斬新さにあるだろう。実証的調査に関しては、例えば「第七官界彷徨」に登場する薮がマルダイゴケであると特定される。また「こほろぎ嬢」でこほろぎ嬢が訪ねる図書館は帝国図書館がモデルであると特定され、いずれも作品解釈に活かされる。発想の斬新さでは、従来難解であると評されてきた「こほろぎ嬢」の読解がとくに興味深い。著者は作品終盤に登場する「産婆学の暗記者」を幻覚であると解釈し、さらに「こほろぎ嬢」を他作品との連作と捉える立場から、語り手「私たち」は他作品に登場する人物たちで、他作品の登場人物が作者を語ると解釈することより「創造性における男性の優位性」を示すピグマリオンの構造を脱構築し、メタフィクション性を獲得すると論じる。そして「歩行」論と「地下室アントンの一夜」論では尾崎翠作品に描かれるカタルシスや自由さについて論じ、従来の作品論を進め、一石を投じる。

著者が尾崎翠という作家やその作品に對峙して格闘し、誠実に精緻に読解した軌跡である本書は、文学作品を〈読むこと〉や、それをどう読んだか〈書くこと〉を通してもたらされた驚きや共鳴に満ちている。新鮮でユニ

ークな尾崎翠研究書が出版されたことを喜
びたい。

(二〇二三年三月二〇日 臨川書店 三〇

〇頁 定価三九〇〇円+税)



◆募集人数 自由発表 若干名

特集についての発表 若干名

パネル発表 若干グループ

◆応募締切 一月三十一日(水) 必着

◆応募要領 自由発表・特集についての発表
は、発表題目および六〇〇字程度の(応募段
階における)結論まで明記した要旨を封書で
お送りください。パネル発表は、発表題目と
全登壇者の氏名と役割分担、および一〇〇〇
字から一五〇〇字程度の趣旨文を封書でお
送りください。科研費プロジェクトの成果報
告等も受け付けております。発表者数は企画
者に一任いたしますが、関西支部会員を一名
以上入れてください。

発表時間について、自由発表は三〇分程度、
パネル発表は二時間程度です。応募の際は、
必ず連絡先(電話番号・メールアドレス等)も
明記してください。発表に関して、ご不明の
点は事務局までおたずねください。

【応募先】〒630-8506

奈良市北魚屋西町奈良女子大学文学部

吉川仁子研究室内

日本近代文学会関西支部事務局

もしくは、関西支部公式ブログに記載の

メールアドレスまで。

■機関誌『関西近代文学』投稿論文募集のお知らせ

電子版機関誌『関西近代文学』の投稿論文
を募集いたします。

○第三号(二〇二四年三月発行)の締め切り

……二〇二三年十一月五日

○第四号(二〇二四年九月発行)の締め切り

……二〇二四年五月五日

送り先、書式(文字数)等については、公
式ブログを御覧ください。



第二号は、二〇二三年九月二〇日に公式ブ
ログにて公開されました。

○第二号・目次

「寺山修司作台本「盲人書簡(上海篇)」論

——言葉としての闇——」

劉夢如

論文要旨

電子版『関西近代文学』投稿規定／査読方法

及び審査基準

編集後記

■事務局だより

◆二〇二二年度支部報告ならびに二〇二三
年度支部活動につきまして、会員諸氏より承
認をいただきましたことをご報告し、御礼申
し上げます。

◆関西支部会則の改定について

二〇二三年五月二十八日の総会において、関西
支部会則の一部が改定されました。(傍線部
を追記または変更)

第一条(設立と名称)

本会は、一九七九(昭和五十四)年に設立さ
れ、日本近代文学会関西支部と称する。

第五条(役員)

本会に次の役員を置く。

一、支部長 一名 運営委員 若干名

編集委員 若干名 会計監査 二名

二、運営委員と編集委員は、各委員会にてN会

員から候補者を選出し、総会の承認を得る。

三、支部長は、運営委員によって構成された

選考委員会でN会員から候補者を選出し、

総会の承認を得る。

四、会計監査は支部長の委嘱により総会の承

認を得る。

五、役員の任期を次のように定める。

1 支部長の任期は二年とし、再任を妨げ
ない。再任の場合はその任期を一年とし、
連続して四期の選出は認めない。

■二〇二四年度 関西支部春季大会 研究発表募集のお知らせ

日本近代文学会関西支部では、二〇二四年
度春季大会における自由発表(個人・パネル)、
特集についての個人発表を募集いたします。
特集の趣旨については、同封の別紙をご覧く
ださい。支部会員の皆さまの積極的な応募
をお待ち申し上げます。

◆日時・会場 二〇二四年六月上旬

帝塚山大学

※詳細は決定次第、関西支部公式ブログでお
知らせいたします。



- 2 運営委員の任期は二年とし、再任を妨げない。再任の場合はその任期を一年とし、連続して三期の選出は認めない。
- 3 編集委員の任期は二年とする。
- 4 会計監査の任期は一年とする。

六、必要がある場合は、右役員以外に特別役員を置くことができる。

特別役員は、運営委員会の議を経て支部長が委嘱する。

附則

二〇二三(令和五)年五月二十八日の総会で

改正

二〇二四(令和六)年四月一日より施行

◆献本のお願い

本会報では、支部会員の皆様が刊行された書籍を対象とする書評欄を設置しております。事務局では、書評を希望される書籍を随時受け付けております。左記の要領でぜひお送りください。

○対象となる書籍…支部会員の学術的な刊行物で、単著、あるいは支部会員が関わって刊行された書籍

○送付先…関西支部事務局

なお、書評欄への掲載の採否、時期、および書評者の人選については、関西支部運営委員会に「一任ください」。

◆会費納入について

会費納入は単年度でお願いいたします。次年度への繰り越しはできません。単年度で三〇〇〇円以上お振込された場合は寄付扱いといたします。

◆登録情報変更について

関西支部の「登録情報変更届」を作りましたので、変更の際には事務局までお知らせください。用紙は関西支部公式ブログからダウンロードできます。

◆二〇二三年度役員

支部長 関肇

運営委員長 吉川仁子

運営副委員長 浅井航洋、西尾元伸

〔書記〕 金岡直子、塚本章子、原卓史、

宮川康

〔名簿〕 武田悠希、八原瑠里

〔会計〕 熊谷昭宏、瀬崎圭二、信時哲郎、

花崎育代

〔会報〕 石原深予、永淵朋枝、福田涼、

松田樹、禧美智章

〔広報〕 高橋啓太、廣瀬陽一

〔企画〕 佐々木幸喜、東口昌央、山根直子、

矢本浩司

〔事務局補助〕 西薗有加利

◆二〇二三年度『関西近代文学』編集委員

編集委員長 増田周子

編集委員 木田隆文、木谷真紀子、

*瀧本和成、*田口道昭、田中励儀、

*宮薗美佳、*渡邊ルリ

日本近代文学会関西支部事務局

〒630-8506

奈良市北魚屋西町

奈良女子大学文学部

吉川仁子研究室内

日本近代文学会	関西支部
会報 三八号	二〇二三年一〇月一日
編集・発行人	関肇
日本近代文学会	関西支部
〒630-8506	
奈良市北魚屋西町	奈良女子大学文学部
吉川仁子研究室内	

※漱石から森見登美彦まで、短篇の構築性を解き明かす論集
問いかける短篇 翻案・童話・寓話

木村小夜 視点人物の錯誤や死角・物語が孕む矛盾・構成上の断絶・変則的な因果の構図や定型からの逸脱・反復の中の変化に着目、原拠や周辺の諸言説との比較検討を通して、漱石・鷗外・芥川から三島などの戦後作家、さらに直近の現代作家の短篇に即して、その緻密な構築性を解明する。
定価5500円 税込

※文学は文壇作家の小説の中だけにあつたのではない
無名作家から見る日本近代文学

島崎藤村と『処女地』の女性達
永瀨朋枝 日本近代文学を無名作家群からも見渡せば、メディアにより文学がつくられていった大きな流れが見える。有名作家と無名作家、男性作家と女性作家、作家と読者との双方を見、雑誌を他の新聞雑誌との連関の中で捉える。
定価5940円 税込

※南吉生誕百十年記念出版

新美南吉の詩と童話
哀のある愛の世界

谷悦子 南吉の幼年童話と詩が、豊かな空想力・ユーモア・哲理性をもち、子どもの複雑な心と人はどう生きるべきかを描いた童話に新しさがあることを論じた。また、安城高等女学校での教師としての南吉を明らかにした。
新刊・定価3300円 税込

※十蘭作品の多角的・総合的解明を目指す

久生十蘭作品研究〈霧〉と〈二重性〉

開信介 「小説の魔術師」久生十蘭。その作品群は多様な文体、巧緻な構成といった小説技巧の面で高く評価されてきた。本書は、新資料を含む十蘭の創作全268作品を網羅的に調査・分析し、十蘭作品に頻出するモチーフを切り口として、その作品世界を明らかにするものである。
新刊・定価3520円 税込

※田辺聖子の膨大な文学的業績の全貌を明らかにする

田辺聖子文学事典 ゆめいろ万華鏡

浦西和彦・檀原みずす・増田周子編著 世代を超えて愛され続ける田辺文学の軌跡を事典形式で追求。小説などの作品名とエッセイ・評論などの書名を項目見出しとし、全560項目を五十音順に配列。よみ、ジャンル、初出、初版などの書誌情報と内容を掲載。年譜付。
定価3850円 税込

※事典と書誌を結ぶ新しい書物

河野多恵子文藝事典・書誌

浦西和彦 「幼児狩り」で新潮社同人雑誌賞を、「蟹」で芥川龍之介賞を、「最後の時」で女流文学賞を、「不意の声」で読売文学賞を、「谷崎文学と肯定の欲望」で読売文学賞（評論・伝記賞）を、「一年の牧歌」で谷崎潤一郎賞を、「みいら採り狼奇譚」で野間文藝賞を、「後日の話」で伊藤整文学賞を受賞。河野多恵子文学の精髓を事典・書誌で追求する。
定価16500円 税込

※近代日本文学の空白を埋める！

近代戦争文学事典 第十四輯

矢野貫一編 戦争文学および周辺の文献を明治より出版年代順に配列。書誌、内容を録し、論評を加える。各輯に書名作品名・著者編者名索引付。
定価10450円 税込

好評既刊
(各税込)

第一輯	品切	第二輯	11000円
第三輯	11000円	第四輯	品切
第五輯	品切	第六輯	品切
第七輯	13200円	第八輯	13200円
第九輯	14300円	第十輯	15400円
第十一輯	16500円	第十二輯	11000円
第十三輯	11000円	第十四輯	10450円

既刊10冊 定価127050円 税込

大阪近代文学事典

日本近代文学会関西支部大阪近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ16 定価5500円 税込

滋賀近代文学事典

日本近代文学会関西支部滋賀近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ23 定価8800円 税込

兵庫近代文学事典

日本近代文学会関西支部兵庫近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ26 定価5500円 税込

京都近代文学事典

日本近代文学会関西支部京都近代文学事典編集委員会編
和泉事典シリーズ29 定価6380円 税込

日本近代文学会関西支部編

鉄道 関西近代のマトリクス

和泉ブックレット1 定価990円 税込

近代文学のなかの 関西弁

語る関西／語られる関西

和泉ブックレット3 定価1210円 税込

文学研究における継承と断絶

関西支部草創期から見返す

和泉ブックレット5 定価1100円 税込

海を越えた文学 日韓を軸として

和泉ブックレット7 定価1100円 税込

村上春樹と小説の現在

定価2640円 税込

作家／作者とは何か

テキスト・教室・サプカルチャー

定価3960円 税込